

P1-514 産褥9日目に腹部大動脈破裂により突然死した Ehlers-Danlos 症候群が疑われた一例

新潟市民病院

郷戸千賀子, 渡邊亜由子, 菖蒲川紀久子, 田村正毅, 柳瀬 徹, 倉林 工, 花岡仁一

【諸言】 Ehlers-Danlos 症候群は、皮膚の過伸展・関節の過可動・易出血性を3徴候とし、時に心血管系の異常により大動脈破裂をきたすこともあるコラーゲン代謝異常症である。今回、産褥9日に突然死し、病理解剖にて本症が疑われた一例を経験したので報告する。【症例】33歳、1妊0産。既往歴に家族性の高脂血症、過去4回の自然気胸、鼠径ヘルニア、小児期からの易出血性を認める。Clomifene + prednisolone + HMGにて二絨毛膜二羊膜性双胎妊娠成立。妊娠34週0日、第2子のIUGR, non-reassuring fetal statusを適応に選択的帝王切開術施行。術前、血管性紫斑を認めるも血液凝固能検査で異常を認めなかった。術後経過良好にて産褥9日退院したが、同日自宅で倒れているところを発見され救急搬送された。来院時心肺停止状態であり、蘇生処置行っても反応せず永眠した。病理解剖にて、皮膚の脆弱性、両母指関節過伸展、左広間膜から横隔膜に及ぶ広汎な後腹膜血腫を認め、腹部大動脈解離、破裂が判明し、既往歴からも Ehlers-Danlos 症候群が疑われた。【結論】極めて稀な、Ehlers-Danlos 症候群と思われる、腹部大動脈破裂により突然死した褥婦の一例を報告した。

P1-515 異なる経過を辿った血液透析合併妊娠3例の検討

東京女子医大

山口裕加, 牧野康男, 梅崎 泉, 三箇島睦実, 小野恵里奈, 秋澤叔香, 川道弥生, 三谷 穰, 松田義雄, 太田博明

異なる経過を辿り、早産にいたった血液透析 (HD) 合併妊娠3例を経験したので報告する。症例1) 34歳, G0P0. 糖尿病性腎症。非妊時のHbA1c 5.0%で、HD前値はBUN 80.7mg/dl, Cr 12mg/dlで、1回4時間、週3回で維持されていた。HD導入後1ヵ月で妊娠成立。羊水過多のため透析日数の増加(週6回)と体外限外濾過の併用を要したが、徐水に伴う母体循環不全による血圧低下にて、28週5日で緊急帝王切開施行。児は1,019g(週齢相当)で生後11ヵ月の時点で発達は良好。母体は術後無症候性心筋梗塞を発症したが、内科的治療にて軽快。腎機能の増悪(-)。症例2) 37歳, G2P1. 糖尿病性腎症と多嚢胞腎。非妊時のHbA1c 7.2%で、HD前値はBUN 68.9mg/dl, Cr 8.9mg/dlで1回4時間、週3回で維持。HD導入後3年で妊娠成立。週5回に透析回数を増やしたが、妊娠28週より胎児発育が停滞。妊娠31週0日でHD中に遅発一過性徐脈が頻発したため緊急帝王切開施行。児は1,202g,SFD。生後5ヵ月の時点で発達は良好。母体の術後経過は良好。症例3) 28歳, G0P0. ネフローゼ症候群と片腎。HD前値はBUN 73.3mg/dl, Cr 10.2mg/dlで、週3回で維持。HD導入後4年で妊娠成立。妊娠中は透析回数が週5回とす。妊娠35週4日で母体血圧上昇したため緊急帝王切開施行。児は1,732g,SFD。生後3ヵ月現在発達は良好で、母体の術後経過は良好。【結語】透析中の妊娠3例はいずれも早期娩出となったが、透析回数の増加にともなう母児双方のリスクの関与が示唆された。

P1-516 妊娠中に化学療法を施行した胃癌合併妊娠の一例

名古屋第二赤十字病院

林 和正, 山室 理, 西山幸江, 茶谷順也, 加藤紀子, 倉内 修, 小林 巖

【緒言】妊娠に合併する胃癌は稀で、妊娠中に化学療法を施行した例は極めて少ない。今回、妊娠23週に診断され化学療法を施行した胃癌合併妊娠の1例を経験したので報告する。【症例】33歳の未産婦。妊娠成立後、他院で健診を受けていた。妊娠22週3日に突然の腹痛あり、卵巣腫瘍基捻転の疑いで当院紹介初診した。超音波とMRIでは悪性卵巣腫瘍もしくはKrukenberg腫瘍の疑いであった。疼痛コントロール不良の為、翌日緊急手術を施行した。開腹所見は両側卵巣がφ7cmに腫大し、不整形で一部出血を認めた。術中病理にてMetastatic adenocarcinomaの診断を得た為、両側付属器摘出術を施行した。術後に胃カメラを施行し、生検したところsignet ring cell carcinomaの診断を得た。また、超音波にて頸部リンパ節の腫大を認めた。夫婦にインフォームドコンセントをしたところ、妊娠継続しながら胃癌の治療をする事を結論された。妊娠25週からTS-1を80mg/body×14日間・ドセタキセル80mg/bodyを1週間あけて計2コース施行した。頸部リンパ節は縮小し、二回目の胃カメラでも明らかな癌の進行はなかった。しかし、妊娠29週のMRIで多発骨転移を認めた。化学療法の重篤な副作用はなかった。徐々に疼痛増悪した為、妊娠継続不能と判断し、妊娠35週2日帝王切開術を施行した。腹腔内に肉眼的には病変を認めなかった。児は2112g女児Ap8-9-9で明らかな化学療法によると思われる所見はなかった。胎盤も特に異常はなかった。術直後から母体の全身状態は悪化し術後7日目に永眠された。【結語】妊娠中のTS-1・ドセタキセルの使用は母児ともに副作用が軽微であった。頸部リンパ節が縮小するなど一定の効果が認められた。